国木田独歩の佐伯作品

工藤　茂

はじめに

周知のように、国木田独歩は明治二十六年豊後の佐伯に来て、一年足らず在住した。それは短い滞在であったが、そこの自然は彼に十数編の作品を書かせた。そのうちの「源おぢ」「春の鳥」「鹿狩」については既に触れたので、ここではそれ以外の作品を取り上げ、それらについて述べてみたい。

一　「小春」

「小春」は明治三十三年に発表された小品である。瀬沼茂樹の解題（注①）によると〈『小春』は明治三十三年十二月五日発行の『中学世界』第三巻第十六号に発表され、後、第一文集『武蔵野』に収められた。この作品はワアズワスとの邂逅を語るものとして重要であり、従来初出不明のものであった。〉

〈十一月某日、自分は書斎に籠って書見をして居た。〉

作品の冒頭は右の一行から始まる。「自分」が読んでいたのは、ワーズワース詩集であった。この詩集は、彼が八年前に買った詩集である。それから八年、今やその詩集は、彼を動かす力が消え果てていた。それは彼が老熟した結果であった。しかしこの老熟は、真の老熟ではなかった。「自分免許」の老熟であった。彼は自分の詩心がいつか俗化していることを自覚していた。

〈処で自分免許の此の老熟先生も実は流石に全然老熟し得ないと見えて、実際界の事が甘く行かず、此頃は家にばかり引籠って居て多く世間と交はらない。其結果でもあらうかヲーズヲルス詩集までが一週間に二度位は机の上に置かれるやうになった〉

こうして、書斎に籠ってワーズワースのワイ河畔の詩（注②）を読んでいて、彼の中に蘇って来たのは、七年前〈田舎教師として此所に一年間滞在して居た〉〈佐伯の風光〉であっ

た。

彼地に於て自分は教師といふよりも寧ろ生徒であつた。ヲーズヲルスの詩想に導かれて自然を学ぶ処の生徒であつた。成程七年は経過した、然し自分の眼底には彼地の山岳、河流、渓谷、緑野、森林悉く鮮明に残つて居て、我故郷の風物よりも幾倍の色彩を放つて居る。何故だろう？

ここに登場する「自分」は、独歩自身と見てほぼ間違いなかろう。七年前に佐伯に行っていたこと、その前年にワーズワース詩集を手に入れていることから推察して。

瀬沼茂樹もそのように考えて〈作者は明治三十三年十一月、原宿の自宅でワアズワスを読み返し、『チンテルン精舎の詩』にある「人情の幽音悲調」に思ひをひそめながら、この詩集に心酔した佐伯時代を追想する。八年の歳月に、いつかワアズワスを閑却するやうになつたことを反省し、「人は歳月の谷間へと下る」といふ人の運命に「彼時はお互に未だ若かつた」と頭を掻く。〉と解題の続きを書いている。

さて、明治二十七年に佐伯を去ってから足掛け七年、その間に独歩の身の上には様々なことがあった。佐々城信子との結婚と別離の悲劇、榎本治との結婚、長女貞の誕生。一家の主人としての世俗的な生活の苦しみなど。それを独歩は登場人物「自分」を通して〈爾来数年の間自分は孤独、畏懼、苦悩、悲哀のかず〳〵を尽した、自分は決して幸福な人ではなかつた、自分の生活は決して平坦ではなかつた。（略）我心は此等の圧力を加へらるゝ毎に数々番匠川畔の風光を憶つた。〉と書いていく。

この作品の舞台は瀬沼の解題に述べられているように、佐伯ではなくて東京である。しかし、そこで彼の内面に展開する光景は、ワーズワースの詩の世界であり、それによって触発される佐伯の風光なのである。彼には、自分の故郷の風物よりも、佐伯のそれが鮮明に蘇って来るのだった。それなのに〈今や如何、今や如何。我此一二年の生活は殆ど佐伯を忘れしめ、而してたまさかに佐伯を憶へば彼時の生活は我ながら我の如くには思はれなくなった〉のである。あの頃の純粋な魂、若々しい詩心は失われてしまったのであろうか。

自分は詩集を其儘にして静に佐伯のことを憶ひはじめた。流石に忘れ果てゝは居ない、彼時の事此時のこと、自分の繰返した逍遙の時を憶ふにつけて其時自分の眼に彫込まれた風光は鮮かに現はれて来る、画を見るよりも鮮明に現はれて来る。秋の空澄み渡つて三里隔つる元越山の半腹から真直に立上る一縷の青煙すらあり〳〵と眼に浮んで来る。

そこで佐伯時代に付けていた日記を出して読み、その時その時の風景を思い浮かべていた時に来訪者があった。それは小山という青年であった。

小山は「自分」が佐伯にいた時分と同年輩の青年で、画家になろうと熱心に勉強している同郷の後輩であった。彼の顔には暗鬱な影があった。というのも、医師にしたいという両

親の意志に反して、画家たろうと志しているからであった。青年が取り出して見せた二三枚の写生は〈進歩が頗る現はれて、最早や素人の域を脱して居る〉と「自分」には見えた。散歩に出ようと誘う青年をしばし留めて、「自分」は次のように語り出す。

『恰度君の年だった僕がヨーズヨルスに全心を打こんだのは、其熱心の度は決して君の今画に対する熱心に譲らなかった。君が画板を持って郊外をうろつき廻はって居るやうに、僕は此詩集を懐ろにし佐伯の山野を歩るき散かしたが、僕は今もその時の事を思ひだすと何だか懐かしくって涙がこぼれるやうな気がするよ』

「自分」と青年とは〈同じ自然の崇拝者である。彼は画に由て、自分は詩に導かれて。自分の語る処は彼に能く了解る。彼の問う処は自分の言はんと欲する処〉である。彼は青年に、佐伯時代にその自然を文章でスケッチした日記を示す。

野を散歩す日暖かにして小春の季節なり。櫨紅葉は半ば散りて半ば枝に残りたる、風吹くごとに閃き飛ぶ。海近き河口に至る。潮退て州あらはれ鳥の群、飛び廻る。水門を下ろす童子あり。灘村に舟を渡さんと舷に腰かけて潮の来るを待つらん若者あり。背低き櫨堤の上に樹ちて浜風に吹かれ、紅の葉毎に光を放つ。野末杳に百舌鳥のあはたゞしく鳴くが聞ゆ。純白の裏羽を日にかゞやかし鋭く羽風を切って飛ぶは魚鷹なり。其昔に小さき島なりし今は丘となりて、其麓には林を周らし、山鳩の栖処に恰好しきがあり。其片陰に家数二十には足らぬ小村あり、浜風の衝に当りて野を控ゆ。（十一月二日の記）

彼は更に十一月二十二日の夜のところも読むのである。

月の光、夕の香をこめて僅に照りそめし頃河岸に出づ。村々浦々の人、既に舟と共に散じて昼間の喧しきに似ず最と寂びたり。白馬一匹繋ぎあり、忽ち馬子来り、牽いて石級（段カ）を降り渡船に乗らんとす。馬懼れて乗らず。二三の人、船と岸とに在って黙して之を見る。馬漸く船に乗りて船、河の中流に出づれば、灘山の端を離れて冴えくと照る月の光、鮮かに映りて馬白く人黒く舟危し。何心なく眺めて在りし吾は幾百年の昔を眼前に見る心地して一種の哀情を惹きぬ。船廻りし時我等亦た乗りて渡る。中流より石級の方を望めば理髪所の灯火赤く四囲の闇を隈どり、そが前を少女の群ゆきつ返りつして守唄の節合するが聞ゆ。

彼はなおも、十一月二十六日の記を青年に読んで聞かせるのであるが、それを引用するのはやめておこう。こうして「小春」には佐伯のスケッチが数多く姿を見せるのである。独歩の故郷の風物よりも幾倍の色彩を放って、彼の内面にその姿を留めていたからであろう。同時に彼は、まだ鋭敏な感受性を持ち、柔らかな詩心の充溢していた佐伯時代の自分の青春に、思いを馳せるのであった。

午後、二人は家を出る。大空は春のようにかすんでいる。その下を歩いて高台に出る。四囲が俄かに開けて、林の上を

見え隠れに国境の連山が微かに見えた。〈此時自分の端なく想出したのは佐伯に居る時分、元越山の絶頂から遠く天外を望んだ時の光景である。山の上に山が重り、秋の日の水の如く澄むだ空気に映じて紫色に染り、其天末に糸を引くが如き連峯の夢よりも淡きを見て自分は一種の哀情を催し、此等相重なる山々の谷間に住む生民を懐はざるを得なかった。〉

彼は小山に自分の抱いた以上のような感情を語りながら行く。林の中に一筋の流れがあり、そこに殆ど落ちんばかりに一本の橋が掛かっていた。そこで小山はスケッチを始め、彼は詩集を開く。林には楢の枯れ葉の磨れ合う音がある。その音を聞いているうちに〈何だか三四年前まで、自分の胸に響いた我心の調に再び触れたやうな心もちがする。〉その時、

『兄さん!』と小山は突然呼んだ、『兄さん、人の一生を四季に喩へるやうですが、春を小生のやうな時として、小春は幾歳位に喩へて可いでしょう』と何を感じたか、彼方へ向いたまゝ言つた。

『秋かね?』

『秋と言はないで、小春ですよ!』

『僕のやうなのが小春だらう!』と自分は何心なく答へて、そして我知らず、未だ嘗て経験した事のない哀情が胸を衝て起つた。

『君が春なら僕は小春サ、小春サいまに冬が来るだらうよ!』

『ハ、、、、冬が過ぎれば又春になりますからねェ』と小山はさも軽々と答へた。

四囲は再び寂然となった。小山は口笛を吹きながら描いて居る。自分は思つた、寧ろ此二人が意味ある画題ではないかと。

「小春」という作品はここで終わる。この部分は、この作品の題名の意味を示すとともに、この作品を解く重要な鍵となるところである。

小山の質問は、「自分」に彼の青春の過ぎ去ったことを自覚させる。小山の年頃に彼は佐伯にあった。独歩こと哲夫が佐伯に滞在したのは明治二十六年の秋から、明治二十七年の夏にかけてであった。そして、それは瑞々しい感受性によって、佐伯の人々と自然に、ワーズワースの詩の世界を観ていた頃であった。「小春」においては、小山がちょうどこの年頃に設定されている。そして、「自分」はそれより七年の先輩となっている。今や四囲の自然が小春であるように、「自分」は人生上の小春を迎えている。この作品の題名が「小春」たる所以であろう。

この三四年、「自分」はかつて〈自分の胸に響い〉ていた〈我心の調〉を失っていた。それが、今日小山とこの林まで来て、はしなくも蘇って来た。その時小山に、先に引用したような質問を受けたのである。「自分」の心に〈未だ曽て経験した事のない哀情〉が起こったのも無理はあるまい。小山は〈冬が過ぎれば又た春になりますからねェ〉というが人生ではそういう訳にはいかない。小春は冬の入口であり、冬は

人生の終焉を厳然と示している。〈寧ろ此二人が意味ある画題ではないか〉と「自分」が思ったのには、彼にその自覚があったからに相違ない。つまり、瑞々しい感受性に溢れて、自然の真を描こうとしている青年と、既にその時期を過ぎて〈我心の調〉すら失いかけている「小春」の自分が同じ林の中に座っている。それはまさに人生の一断面図ではないか。「小春」はこのようにして、自然の小春に重ねて人生の春と小春の姿を描いた小品だったのである。そしてそこに、ワーズワースと佐伯が頻出するのは、その時代が作中人物の「自分」こと独歩（佐伯時代の哲夫）の春だったからに外なるまい。しかし、「小春」の自分に、今〈三四年前まで、自分の胸に響いた我心の調〉が再び流れ出すのを知る。ということは、この小品が独歩のルネッサンスを描いたものであることをも意味するのではあるまいか。

この点を解明した「小春」論に北野昭彦の「独歩「小春」論—詩精神の再生と〈回想〉の意味—」（注③）がある。氏は「わかれ」と「小春」との間に二年の空白があることを指摘したうえで、「小春」を〈独歩が文学的再出発に際して、まず自らの作家主体形成の「本源」と自認するワーズワスの詩精神へ立返ることにより、「実際界」への埋没状態を脱して作家主体の再生を期する心境をのぞかせている〉作品とみる。そして、〈これを契機にして明治三十五、六年の最も充実した創作活動を展開〉したとする。従って、この小品の最終場面を〈再び返らぬ青春への愛惜・諦観という面から捉えるだけでは不十分〉だと言う。これは鋭い指摘であった。

独歩が「源おぢ」によって文学的出発をなしたことは、周知のことであり、私もすでに書いた（注④）。そして、「小春」を書くことに依って文学的な再出発をするのである。独歩を文学者たらしめたこの二作品が、いずれも佐伯に深く関わっていたことに、私はいたく興味を引かれる。彼の内面においてその佐伯体験は、非常に重い文学的な意味を持っていたのである。

ところで、「小春」に引用されるワーズワースの詩はなぜ『チンテルン精舎の詩』でなければならなかったのであろうか。実はその点についても北野昭彦は、同じ論文において次のように述べている。

独歩は“Tintern Abbey”の冒頭の「五年は経過せり」という句と対照させて、「小春」の第二章に、佐伯でこの詩を読んだ時から「七年は経過せり」と記す。ワーズワスが「苦悩に悶き暗憺たる日夜を送る時」にはワイ河畔の風光を思い起こしたのと同様に、彼もそんな時には佐伯の「番匠川畔の風光を憶った」。〈つまり、七年前、ワイ河畔を初めて訪れた二十三歳のワーズワスとほぼ同年齢の数え年二十三、四歳の独歩が、佐伯の番匠川畔の風光に接し、これを“Tintern Abbey”に描かれたワイ河畔の風光とダブル・イメージ化して「眼に彫込」んだ。そしてワイ河畔を再び訪れて“Tintern Abbey”を書いた二十八歳のワーズワスとほぼ同年齢の、数え年三十歳の独歩が、その詩を読返して番匠川畔の風光を

思いつつ「小春」を書く、というふになる〉。ワーズワスは妹を伴ってワイ河畔を再度訪れる。だが、独歩は佐伯を再訪しない。その時代に愛誦したワーズワスの詩や彼の当時の日記を読み返して、意識の中に佐伯時代の生活や風光が「画を見るよりも鮮明に現はれて来る」。それが〈ワーズワスのワイ河畔再訪と同じ意味をもっていたであろうし、さらに「小春」の第四章から小山の名で登場する若い画家の岡落葉と共に、かつて独歩が佐伯に次いでよく歩いた武蔵野を再び訪れるに至って、それはワーズワスが妹を伴ってワイ河畔を再び歩いたのと完全に同じ比重に至るのである。〉

このようにして、独歩がワーズワースの『チンテルン精舎の詩』をこの小品に引用した意図は明らかにされる。と同時に「小春」の構造の特色も明瞭になる。北野の論文のすぐれている所以であろう。ここに紹介して、拙稿の欠を補っておきたい。

二　「豊後の国佐伯」

〈二十六年の夏の終りより、二十七年の夏の初めに至るまで、己れ豊後の佐伯に故ありて住みたり〉の一行で始まる独歩の小品「豊後の国佐伯」は、その瑞々しい感受性と若々しい詩心によって捉えた当時の佐伯の風物が、見事に表現された作品である。この作品の発表は明治二十八年五月と六月の「国民新聞」。一六〇一、一六〇二、一六〇三、一六二七の各号に四回にわたって掲載された。当時独歩の号はまだ使われてはおらず、三十六灘外史となっている。(注⑤)

この小品は序と次の六章からなる。すなわち、一　梟声、二　乞食、三　城山、四　黄昏、五　番匠川、六　柿。

独歩は序において、当時の佐伯を以下のように紹介する。

豊後の地、山嶮にして渓流多し、所謂ゆる山水の勝に富む。佐伯は其の一小市人口五千と称す、もと城下なり、二万石の小藩主を毛利氏と呼ぶ、但し長州の毛利家とは縁もゆかりもなき也。

茲は別天地なり。国道の通ずるあるなく、又た航舟の要路に当たらず。山多く已に水田に乏しく、地痩せて物産すくなし。

けれどもこの地は、独歩にとっては殊にも〈別天地の感〉のあるところであった。独歩の愛読したイギリスの詩人ワーズワース(William Wordsworth, 1770-1850)の詩に、「一人の少年」(There was a Boy)という詩がある。

一人の少年がいた。
ウィナンダーの断崖と島々よ、
お前たちは彼をよく知っている。
幾度となく、黄昏れどき、
一番早い星々が山の端に見えつ隠れつ動きそめるころ、
樹の下に、あるは、うすひかる湖水のほとりに、
少年はただひとり佇んでいた。
彼は指と指とを組み合わせ、

口につけては笛のように、
沈黙せる梟が答えるために、
ホーホーと真似声を立てた。
すると梟は湿っぽい谷を越えて叫び、
彼が呼べば梟も、また、叫んだ。
ふるえる音、長い声、鋭い叫び、
そして声高き反響がくり返された。
陽気な騒ぎの狂える混乱！
やがて声がと切れて沈黙が来り、
少年の巧妙な誘引も無駄だった。
そして時々、その静けさの中に耳をすますと、
心を静かにゆする滝の音が、
思いがけなく優しく彼を驚かした。
或は、また、眼に映ずる景色が、
その厳かなる姿や、厳や、
森や、静かな湖水にうつる定かならぬ空と共に、
彼の心に不意に這入って来た。
この子供はまだ満十二歳にもならぬうちに、
友だちと別れ、若くして死んだ。
彼が生まれて育ったところは、
殊のほか美しい谷だった。
墓地は村の学校の上の斜面にあって、
夏の夕暮などにその墓地の間を過ぎるとき、
私は少年の這入っている墓を見守って、半時間ほどのあいだ黙って立ちつづけた。（注⑥）

この詩は、「春の鳥」の中に次のように引用されている。

△英国の有名な詩人の詩に『童なりけり』といふがあります。それは一人の児童が夕毎に淋しい湖水の畔に立つて、両手の指を組み合はして、梟の啼くまねをすると、湖水の向の山の梟がこれに返事をする、これを其童は楽にして居ましたが遂に死にまして静かな墓に葬られ、其霊は自然の懐に返つたといふ意を詠じたものであります。▽独歩はこの引用の後に続けて△私はこの詩が嗜きで常に読んで居▽た、と書いている。

「梟声」において独歩は、城山の深樹に、五所大明神の杜に、また、若宮八幡の杉の暗き梢に梟の声を聞いたことを述べた後、以下のような数行でこの項を締めくくっている。

小児の時習ひ覚へたる如くに十指を組みて笛となし、試みに彼れの声を模して応ずれば、彼れ更に寂寞の調を以て答ふ。然れども余已に少年に非ず。無心にして彼れを友とし語る能はざりき。彼れを『夜の悲しき鳥』と呼ばざるを得ざりしを悲しみたり。

右の箇所を読む時、我々の脳裏にはすぐに先に引用したワーズワースの詩が浮かび上がってくる。独歩は意図的にこう表現したのに違いない。というのも、佐伯の自然とワーズワースの詩の世界とは、独歩の内的世界において分かちがたく重層していたのだから。

ところで、独歩には佐伯のどのような場所が最も印象深かったのであろうか。この小品を読んで見て思うことは、独歩に

は鶴谷城跡、つまり、城山こそが佐伯そのものだったのだということである。

余が初めて佐伯に入るや先ず此の山に心動き。余已に佐伯を去るも眼底其景容を拭ひ去る能はず、此の山なくば余には殆んど佐伯なきなり。

右の引用文中〈此の山〉というのが、その城山のことである。

佐伯の春先ず城山に来り、夏先ず城山に来り、秋又た早く城山に来り、冬はうど寒き風の音を先ず城山の林にきく也。

城山寂たる時、佐伯寂たり。城山鳴る時、佐伯鳴る。佐伯は城山のものなればなり。

独歩はこのように城山を佐伯の象徴として描いているのである。彼は後に、こよなく愛したこの城山に、白痴の少年を配して、一編の美しい小説を書きあげる。それが「春の鳥」であった。その小説の初めの部分には、この小品の「城山」の条にある〈独り城山に登りて其背面のもの寂し気なる処に至れば、蔦葛纏ひたる石垣の蔭に人の声きこゆ、近づけば三人の村女可憐の姿にて折れ枝を集めて居たる〉場面を挿入している。

〈年老ひたる旅客が連れもなく、独り日向地へと此の川を渡り行く姿を見送りしは、余が佐伯に着したる其日の薄暮なりき、これ余が此の川を見たる最初なり。〉という一文で書き出される番匠川は、独歩の内面においてワーズワースのワイ川と重層する流れであった。その流れを独歩は次のように紹介する。

『椎茸を作る谷』の幽邃なる辺より流れ出でて、みちく渓流を集め、瀬をなし淵をなし、鰍、鮒、鮎、鯉、などを養ひ、時に奥山にてきりだしたる材木を浮かべ、佐伯の市街を沿ふて流るゝ前に先ず城山の腰に湛へ、茲に始めて海より泝り来る朝夕の潮と交はる。市街の裾にて三分して大なる『デルタ』を作り、本流は灘山の麓に至り柏江の方より来る流及び木立の方より来る流と合して間もなく海に注ぐ

その流れは夕暮れになると以下のような美しいたたずまいを見せた。

一日村落に遠行して疲れはて、新月の影薄く地上に印する頃漸く此の渡場につけば、対岸の灯火鮮明に水に映じて動く。已に舟に乗りて河の半ばに出で上流を顧みれば、水光天に映じ、暮色水に落ち、宵の明星水底に在りき

この番匠川の流れる佐伯の町で、独歩は一人の乞食の少年と邂逅する。その姿は彼に大きな衝撃を与えた。

余が始めて此の乞食を街頭に見たる時は、之れ地獄の垣を抜け出でし者かと傍らの人に語りき。

人間も零落すれば斯く迄にも零落する者かと、命運の恐ろしき力を感じたり。　（略）

破れ傘を腋に抱き、腐りたる草履を垢に黒き足にはき、

痩せて枯木の如き手に握りて、何とも知れざる物を口に運びつゝ行く彼れを見たり。雨降る日却て傘を持たずして、軒端に影の如く立つ彼れを見たり。

（略）

余は彼れに於て始めて、世の外に住む人を見たり。

（略）

市人は一口に彼れを乞食といへど、余は屢々『彼れは何者』と自から問はずして止む能はざりしなり。

人間とは何か、何処から来て何処へ行くのかという命題を常に抱えていた独歩にとって、乞食の少年の存在は人間についてのもう一つの思惟を彼に迫った。と同時に、この少年に対するやむなき同情も彼の内面には沸き起こっていた。おそらくそのようなことから、ここに描かれた乞食の少年は、やがて彼の小説「源おぢ」の中に紀州という少年となって登場することになる。

弱者に対する深い同情を見せる独歩はまた、小児への親愛感が人一倍強かった。この独歩の親愛感は、「黄昏」の項に具体的に表現される。そこには佐伯の夏の黄昏の光景と、＜城山の麓なる井戸＞を汲む＜士族の子女たる可憐の風采失はざる＞少年少女の姿が点描されている。

「豊後の国佐伯」の最後は「柿」の章である。独歩は佐伯に種々ある食べ物の中から、その代表として柿を選んだ。

佐伯は汁粉、鮨、焼甘藷の新市街に非ずして、柿、梨、枇杷、栗の古城市なり。其うち殊に柿は此地の秋の甘露とも云ふ可し。

独歩はその柿の特色を以下のように表現する。

佐伯の柿には核なし、其の形少しく平円なり。径殆んど一寸五分、されど枝より直ちに口に運ぶこと能はず、湯ぬき若しくは樽ぬきにして始めて食ふに足る。三百個を酒樽に入れ、十日を経て其鏡を開けば、香気已に尋常のものに非ず、手にとれば重し、汁多ければなり、握れば堅く、口に入るれば溶け、液透明にして冷やゝかなり。大なるもの二個を食へば余は満足す、されど嘗て鹿狩の帰路、村女の背籠より五個を食ひ、更らに五個を食ひし事あり、朝食に代へたるなり。

右の文中に＜鹿狩の帰路＞とある、その体験は後に「鹿狩」という作品となって結晶することになるが、要するに独歩は柿が好きだったのであろう。彼はこの章を＜佐伯は実に果物の古城市なり。此地に城山なく、番匠川なくとも、猶ほ彼の柿だにあらば以て再遊三遊、四遊するに足る。＞と結んでいる。

先にも述べたように、「豊後の国佐伯」は独歩が佐伯を去った後に書かれたものである。彼は在伯中に詳細な日記をつけていた。その中から彼は最も印象深かった五つの事象を選択してこの小品を書いた。その選択には時間の経過というフィルターがあったに違いない。その取捨選択の技とスケッチの力が、このようないい文章を彼に書かせたのである。

〈注〉

注①　『国木田独歩全集』第二巻（昭和三十九年七月一日発行・学習研究社）の「解題」。

注②　ワーズワースの詩「ティンタン寺より数マイル上流にて詠める詩」。

参考までに、田部重治選訳『ワーズワース詩集』（岩波文庫）の当該詩を左に掲げておく。

いつとせは過ぎ去りぬ。
五つ度の夏は五つ度の長き冬と共に過ぎ去りぬ。
われ再びここに、山深き泉よりまろび出で、
かそけく囁やきつつ山路走る瀬の音をきき、
聳え立つけわしき絶壁を見る。
そは人里はなれし奥まれる景色に
一きわ深き静寂の思いを与え、
地上の光景と大空の静寂とを結ぶ。
月日は周りて、われ再びこの地に来り、
小暗き楓の下に憩いて、
農家の屋敷、果樹園の茂みを眺む。
これらの樹木は未だ熟せる果物をつけず、
ただ緑一色に包まれ、
小森や雑木林の中に姿をかくす。
ふたたび見るこれらの籬、籬とは名のみ、
おどける雑木林の僅かに列をなせるもの。
鄙ぶる農園はその戸口までも青々として、
樹々の間より環となって静かにのぼる煙りの條。
家なき森の中にさすろう人の焚火か、
それとも或る隠者がただひとり洞窟に住いて、
炉辺に坐りてする焚火か、
定かならず……。

これらの美しき姿、
われ見ざること久しきにわたれど、
めしいたる人に取りての景色とは異なれり。
しばしば、われ疲れたるとき、
寂しき部屋のなか、都会の喧騒のなかにありて、
これらの美しき姿に想いを馳すれば、
血潮にしみ、胸にとどろく快き感興おこり、
わが清らなる心に入りて、
静かなる再生の思いあり。
われ、また、忘れられし過去の喜びを感ずる。
そは恐らく、善人の生涯における最良の部分に、
仁愛と慈愛との
ささやかなる名もなき、忘れられたる行為に、
少なからざる影響を与うるもの。
それにも劣らずこれ等の姿より
も一つの気高き姿の賜物をうけたり。
そは一つの幸いなる気分、

神秘なる重荷も、
不可解なるこの世の重々しき厭わしき重圧も、
それに浸れば、すべて取り除かれる心地す。
その静かなる恵まれし気分にあるとき、
愛情は優しくわれらを導びき——
やがてはこの肉体の呼吸も、
血液の運行すらも止み、
われらは肉体において眠り、魂のみ生きる。
かくして調和の力と喜びの深き力とにより、
静かにされし眼もて、
われらは万物の生命を洞察する。

もしこれが、
空しき信念に過ぎずとするも、
暗黒の中にありて、はた、
喜びなき真昼の多くの生活の中にありて、
無益なる焦燥と浮世の激昂とが、
わが心の鼓動の上に重く垂れしとき、
あゝ、わが心の汝に向いしことの何と屢々なりしぞ。
あゝ、森林のワイの流よ、森の中を彷徨い行く者よ、
何と屢々、わが心が汝に向いしことよ。
今や半ば消えし思想の閃めきと、
おぼろにかそけき、
いささか悲しき困惑をもつ多くの想い出とをもって、
心の姿は再びよみがえる。
われここに立ちて、現在の喜びを感ずるのみならず、
更に未来に向っての生命と糧とが、
この瞬間にあることを思うて喜ぶ。
初めてこの山間に来りし時とは
正しくわれ変りたれど、
あえてこの希望を抱くなり。
かつては子鹿のごとく峯を越え、
深き河のほとり、寂しき小川の岸辺を
われ自然に導かれるままとび廻りしが、
愛するものを追い求むるよりは
恐るるものより遁れゆく人に似たりき。
自然はその頃われに取りては凡てなりき。
（その頃のわが少年時代の粗暴なるよろこびと、
その楽しき動物的なる活動とは既に去れり。）
過ぎし己が姿をいま描くこと能わず。
とどろく滝は恋情の如くわれにつきまとい、
聳え立つ岩石、山、深き暗き森、
その色彩も、形も、われに取りては熱望なりき。
思想により与えらるる気高き魅力も、
肉眼もてえられざる興味も必要とせざる
感情なりき、愛なりき。
その時代は既に過ぎ去れり。

あらゆる心ゆく喜びももはやなく、
あらゆる眼くらむ狂喜も今や失せたり。
されどわれはそのために沮喪することなし。
嘆くことなく、つぶやくこともなし。
新たなる賜物はついで来れり。
そは失えるものに代りて、
豊かなる償いとなるもの。
何となれば、思慮なき若き時代とは異なれるさまに、
われ自然を眺むるすべを学び、
人性の静かなる悲しき音楽を、屢〻聞けり。
この音楽は心を清め鎮める広大なる力をもてど、
荒々しき不調和なるものにはあらじ。
われ高められし思想の喜びもて
わが心を動かす一つの存在を感得せり。
そは落日の光の中と、円き大洋と、生ける大気と、
はた蒼き空と人間の心とを住家として、
遥かに深く浸透せる或ものの崇高なる感じなり。
また、凡ての思考するもの及び、
あらゆる思考の対象を動かし、
万物の中を流るる運動と霊とを感得せり。
されば、われ今なお牧場、森、山々を愛し、
緑濃き大地に見ゆる凡てのものを愛し、
眼と耳とにうつる偉大なる世界のあらゆるもの、
眼と耳とが半ば創造し、認知するものを愛する。

かくして自然の中に、はた、感覚に映ずるものの中に、
わが最も純粋なる思想の安住地、
わが心情の乳母、指導者、保護者、
わが精神的存在の魂を認めて喜ばしく思う。
　　なお、また、かく教えらるることなくとも、
われ、そのためわが快活なる心の衰うることなからしめん。
何となれば、われいま汝と共に、
この美しき河岸に立ちおればなり。
わがなつかしの友よ、汝の声の内に、
わが過ぎし日の心の言葉を捉え、
汝の熱せる眼の鋭き光の内に、
過ぎし日のわが喜びを見出す。
あゝ、今しばしの間、
汝の内にわがありし日の姿を眺めたきもの。
あゝ、いとおしき、いとおしき妹よ、
自然を愛するものを、
自然はかつて裏切りしことなきを知りて、われはかく願う。
われら、この地上にありて生きる限り、
喜びより喜びへと導くは自然の恩典なり。
自然はわれらの内心を霊感し、
静穏と美とを印し、高遠なる思想をもって育くみ、
悪しき言葉も、軽率なる判断も、

利己主義者の冷笑も、真実なき世辞も、
日常生活における物憂き交際も、
凡てわれらを説得すること能わず、
また、われらが瞳に映るもの凡ては祝福に充てりとの
われらの楽しき信念を妨げること能わじ。
されば、ひとり寂しく歩く汝の上に
月をして輝らしめよ。
霧深き山風をして、
思いのままに汝を吹かしめよ。
年老いて、これらの烈しき喜び熟して、
落着ける喜びとなり変るとき、
汝の心は美しきもの凡てを入るる住家となり、
汝の記憶の中に妙えなる音と調和とが宿るとき、
あゝ、その時、孤独、恐怖、苦痛、悲しみが汝を襲うとき、
やさしき喜びより起るいかなる慰藉の思いもて、
汝はわれを想い出し、わが勧告を想い浮べることならん。
なお、また、われもし汝の声を聞くことなく、
汝の輝く瞳より過ぎし生活の
この閃めきを捉えざる身となるとも、
汝はこの楽しき流れのほとりに、
共に立ちしことを忘るることなからん。
かくも永き間、自然の崇拝者たりしわれが、
その崇拝に倦むことなく、
むしろより温き愛情をもって、
おゝ、聖なる愛のより深き熱烈さをもって、
ここに来りしことを忘るることなからん。
あまたの漂白の後、訪ずれざる幾年の後、
これらのけわしき森、聳え立つ崖、
この緑なる田園の景色は、
それ自からのため、また汝のために、
われには一きわ親しみ深かりしことを忘るることなからん。

注③　『日本近代文学』第25集（昭和53年10月1日・日本近代文学会）

注④　拙稿「独歩『源おぢ』考」（『別府大学国語国文学』第35号・平成5年12月30日・別府大学国語国文学会）

注⑤　『国木田独歩全集』第十巻（昭和四十三年十月一日第三刷発行・学習研究社）の「発表年月日順著作目録」による。

注⑥　田部重治選訳『ワーズワース詩集』（岩波文庫）より引用。

（本学教授）